魔法のプロジェクト 活動報告書

報告者氏名：伊藤晋介　　所属：千川小学校　　記録日：2023 年 2 月 20 日

キーワード：読み書き困難の学習支援、学習意欲の向上

【対象児の情報】

・学年

小学 4 年生

・障害名

読み書き障害（ディスレクシア）の疑い（診断なし）

・障害と困難の内容

拗音や促音の読み間違い、逐次読みや勝手読み、読めない漢字が多いなど読みに困難さが見られる。文字を書く速度がゆっくりで正確性にも困難さが見られ、読み書きの課題に取り組むことが難しい。国語や算数など教科学習の内容理解と定着が難しいため、教科学習への意欲の低下も見られている。

【活動目的】

・当初のねらい

（1）本児の特性に合った学習方法で基礎学力を伸ばし、学習に対する自信をつける。

（2）心配なことや得意なことを周囲に発信して受け止めてもらうことで安心して学校生活を送ることができる。

・実施期間

2022年5月～2023年2月

・実施者

伊藤晋介

・実施者と対象児の関係

通級指導教室の担当教員と児童【週 2 回の個別指導（1 回 45 分）】

【活動内容と対象児の変化】

対象児の事前の状況

生活場面

・昨年度から遅刻が多く、登校時の表情も暗いことが多かった。

・在籍学級では、宿題忘れや忘れ物が多い。

・話しかけても返事がない、単語で答える、など会話でのコミニュケーションに自信のなさが見える。

読みの実態

・拗音や促音の読み間違い、逐次読みや勝手読み、読めない漢字が多い。

・年度始めにとった URAWSS の読み課題では、読んだふりをしていて、内容理解の問題もほとんど勘で回答していた。

・音読に対して抵抗感が強く、通級の指導でも音読の時には極端に声が小さくなる様子が見られた。

書きの実態

・正しい字形や文字のバランスを整えるのが苦手でゆっくり自分のペースで取り組むが間違えてしまうことも多い。

・板書をノートに全て書き写すことが難しいため、量の調整の支援を受けている。

・書字課題に抵抗感が強く、通級の指導では取り組めないこともある。

・URAWSS の書き課題では、3 分の課題を「30秒やったら少し休みたい」と本人から申し出があり、30 秒区切りで行う程に書字の疲労感が強い。

計算の実態

・分からない問題があると離席して友達の答えを見たり、諦めたり、プリントをぐちゃぐちゃにしたりする様子が見られた。

・4 月の段階では、九九の定着率が 6 割程度で算数のプリント課題には取り組めないことも多い。

その他

・通級指導では、課題の合間にバランスボールで体を動かす時間や休憩時間を設けることで集中を持続することができるが自力ではまだ難しい。

活動の具体的内容

読みの支援

（1）教科書の音読支援

使用アプリ『デイジー』

本児の苦手意識が強い音読の支援として5月～11月頃まで実施した。通級指導の中で週2回5分～10分程度で、在籍学級で取り組んでいる単元の読みの確認をした。読めない言葉、意味の分からない言葉については担当教師と一緒に確認しながら進めた。家庭学習では音読の代わりに使用してもよいことにした。

デイジーを使用した学習には最初から嫌がらずに取り組むことができて、「これは何ていう意味？」と自分から興味をもって質問するようになった。音読よりも負担感が少なく「聞くだけだから楽」と取り組みやすいようだった。「速い方がいいな」と自分で音声の速度を調整しながら自分に合った速度で読み進めることができた。在籍学級では使用したくないと本人が言っていたため、通級指導での使用に留まった。

（教科書の音読を確認）

12月以降は、実際の教科書を使った「教科書間違い探し」の課題を自分から選択することが多くなり、デイジーの使用機会は減少して、教科書を使った学習に移っていった。教科書のアナログ支援では、リーディングルーラー、スリット、

ルーペ、スラッシュ、ルビ振りなどを試したが、本人が「分かりやすい」とルビ振りとスラッシュをした教科書を支援として選択した。教科書のルビ振りについては、学習中に「読み方を書いて」「クラスで今、ここの勉強してるから、また書いて」など自分から支援要請をするようになった。

(2) 正しく読める漢字や熟語を増やす

使用アプリ『国語海賊』

読めない漢字や熟語が多いことが文章を読めない大きな要因となっていると考え、漢字の読みの学習として5月から実施した。通級指導の中では、週2回ほぼ毎回5分～10分程度で取り組んだ。「これ楽しいね」「800G まで貯めたいな」と自分で目標を立てながら意欲的に取り組むことができた。夏休み中にも取り組んでいたようで、夏休み明けには「こんなに貯めたよ」と嬉しそうに見せてくれた。学習に取り組む中で 1 年生から 3 年生までの漢字にも読めない漢字があることが分かった。本人も自分のレベルに合わせて課題を選択することで、苦手な漢字学習で成功体験ができた。取り組み当初は、1 年生や 2 年生の課題ばかりをやっていたが、回数を重ねることで自信がついたのか「4 年生もやってみよう」「5 年生と 6 年生はどうかな?」と習っていない漢字にも挑戦することができるようになってきた。3 学期は「6 年生のボスを倒す」と目標を決めて、6 年生の漢字を中心に学習を進めて「6 年生の漢字やってるんだ」と自慢そうに友達に話していた。

（本人のお気に入りの学習アプリになった）

使用アプリ『Kindle』

漫画の読書習慣をつけて読める語彙を増やすために『Kindle』の電子書籍を 10 月より使用した。本児の好きな『ドラえもん』『ワンピース』の漫画を何冊かダウンロードして、通級指導の中で週に 1 回 5 分から 10 分程度で一緒に読み進めた。最初は読み進めるのに苦労して 5 分程度で「もういいかな」と止めていたが、慣れてくると 10 分程度は読み進めることができるようになってきた。アニメなどで見たことがあるシーンでは、漫画を見ながら「ここで、このキャラがね～」と嬉しそうに担当教師に説明してくれた。11 月頃には「次はこんな本が読みたい」「家でも少し読んだよ」など意欲的な姿が見られるようになったが、読書習慣の定着には至らなかった。

(3) 基礎的なひらがなや単語を読む流暢生を高める

使用アプリ『音読指導アプリ単音直音統合版』『音読指導アプリ単語版ビギナー』

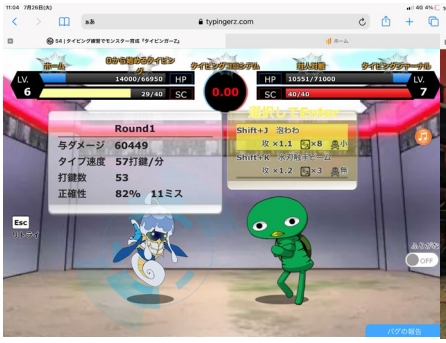
『音読指導アプリ単語版チャレンジャー』

拗音や促音の読み間違いが見られたので、特殊音節の定着とひらがなの単語を流暢に読む練習をするために 5 月より実施した。本人と取り組む量を相談して、1 回の指導で 50 問、週2回の指導で合計 100 問に取り組むことにした。5 月中は単音直音統合版、6 月からは単語読みの課題も並行して取り入れていき、二学期の 9 月以降は単語のみ実施した。単語の課題では、イメージが持てない単語は正確に読めないことがあったが「絵を見たい」「あ、これかぁ」と単語と言葉のイメージを繋げることで徐々に正確に読める単語が増えていった。取り組み当初は、「まだやるの…」「多いよ」と言ったり、ボソボソと聞き取れないような小さい声で読んだりしていたが、2 学期には「もう読めるようになったよ」「簡単だよ」と言ったり、音読の声が大きくなってきたりと自信がついてきた様子が見られた。3 学期には「50 問を 1 分で読みきりたい」と自分で目標を立てて、タイムアタック形式で意欲的に挑戦する姿が見られた。

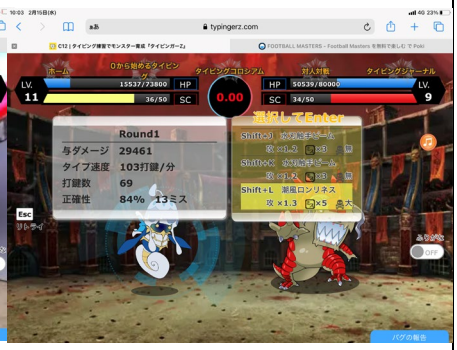
書きの支援

(1) タイピング技能の向上

使用したブラウザアプリ『タイピンガーZ』



（7 月　57 打鍵／分）



（2 月　103 打鍵／分）

書字の代替方法として本児の抵抗感が少なく、興味関心が強いタイピングが有効ではないかと考え、タイピングの基礎技能を高めることを目的に5月より実施した。通級指導では、週2回の指導で毎回5分から10分程度で取り組んだ。最初は担当教師が問題を読み上げてサポートしながら CPU 対戦をしたり、担当教師と対戦したり、強い相手には担当教師と協力して戦うなどの方法を組み合わせて、意欲が低下しないようにしながら取り組んだ。最初は「G ランクが倒せない…」と言っていたが、2学期には「G ランク最後まで倒せるようになった。前は倒せなかったからね」と自分の成長を実感していた。意欲を持って続けることでタイピング技能は向上が見られており、基本的な50音のローマ字や数字や簡単な記号は正確に入力できるようになってきた。ブラウザアプリの数値上でも7月に57打鍵／分だった記録が103打鍵／分まで向上が見られた。タイピングに自信がついてきたようで、在籍学級の友達に「勝負しようよ。俺も結構速いよ。」と自分からタイピングの勝負を挑む姿が見られた。

(2) タイピングによる文章作成に慣れる

使用したアプリ『えにっき』

決められた単語や文章をタイピングで入力することには慣れてきたが、在籍学級では学習感想など自分で文章を考えて表現することが難しい様子が見られた。そのため、自分で文章を考えて書くことに慣れるために 9 月から授業の振り返りを『えにっき』で行うことにした。最初は 10 分程度の時間がかかっていたが、2 月には 3 分程度で写真と学習感想をまとめられるようになった。学習感想の内容は経験したこと、その時の感情を 1 文～2 文程度で書かいた。アプリの読み上げ機能を紹介すると「合ってるかな？確認してみよう」と自分から読み上げ機能を使って、文章が正しく書けているか確認するようになり、間違いがあると「あ、違うな」と自分で修正するようになった。確認をしながら書く経験を重ねることで、9 月と 12 月の内容を比較するとタイトルが具体的に付けられていたり、文章量が増えたり、語尾に「です」「ます」が使われていたりする、などの変容が見られた。

9月27日(火)	感想
ヒットマンガをやった。楽しかった。	

（9 月の振り返り）

12月2日(金)	サッカー遊び
	惜しかったです 次はきめたいです 頑張ります

（12 月の振り返り）

安心して学校生活を過ごすための支援

（1）得意なことを発信する

使用したアプリ『カメラ』『InShot』

本児の得意なサッカーの映像を撮影して周囲の先生や友達に見せることで周囲から認められる経験を積むために５月から実施した。本児と相談しながらボールを蹴って的を倒す動画、輪っかを通す動画などスーパープレイ動画を取り、撮影した映像を先生や友達に見せることで、「すごいね」と声をかけてもらって嬉しそうにする姿が見られた。褒められることで意欲も高まり、2 学期以降は「この角度から撮ってみよう」「次はこれに挑戦しよう」と自分でタブレットを設置して取り組むようになった。この活動を通して日常的に写真やビデオを撮るようになり「見て、最高得点だったよ」「クラスでこんな作品を作ったよ」と自慢そうに見せてくれることが増えた。

（サッカーのスーパープレイを撮影）

（周りの人に見せて褒めてもらう）

（2）困ったことを発信する

使用したアプリ『ドロップステップ』

学校生活で心配なことや困っていることをスタンプや言葉で発信することで、安心して学校生活を送ることができるように５月から実施した。通級の指導では使用せずに日々の生活の中で使用した。最初は意味不明な文やスタンプを送ってくることが多かったが、使い方に慣れてくると「金曜日何時からですか」「明日１時目にしてください」など不安や希望を伝えてくるようになった。2 学期以降は、「この九九表、欲しい」「単位の九九表みたいな道具ないの？」「明日は３時間目？」「算数分かんないから授業を見に来て」など困ったことや支援要請を担当に直接会話で伝えることが多くなっていき、『ドロップステップ』を交流ツールとして活用することは減っていった。

（5月25日）

（6月29日）

(3) 在籍学級の教科学習への意欲を高める

使用したアプリ『NHK for School』

教科学習への意欲を高める目的で５月から自宅と通級指導で使用した。『ビノバ』『パルステップ』など他の学習支援アプリも併用して試してみたが、本児が「これがいい」と選択することが増えたので２学期以降は『NHK for School』に絞って取り組んだ。通級指導では、週２回５分～10分程度で本児が見たい動画を１つと担当教師が見たい動画を１つ選んで見るようにした。取り組み当初は「スマホの危険な使い方」など教科学習ではない内容を選択することが多かったが、担当教師が教科学習に繋がる映像を選ぶことで「今ちょうど水害の勉強してるから、この動画見たい」「体育で縄跳びをやってるから見ようかな」「理科の体の作りを見よう」「国語のうなぎを見よう」と在籍学級の教科学習の内容と連動した動画を本児が自ら選択するようになっていった。夏休み中に自宅で取り組むこともできたようで「夏休みにこれ見たよ」と報告してくれた。映像学習は本児が意欲的に学ぶことができる一つの方法となった。

対象児の事後の変化（担当教師の見取り、本児に関わる先生方へのアンケートから）

生活場面

・昨年度に比べて遅刻の数が減少して、早く登校して友達と楽しそうに遊ぶ姿が見られるようになった。

・表情が明るくなり、挨拶を返してくれるようになった。

・本児から積極的に会話でのコミニュケーションをしてくれるようになり、支援要請も素直にできるようになった。

読みの実態

・URAWSS の読み課題では、以前は読んだふりをしていて、内容理解の問題もほとんど勘で回答していた。しかし、2月に行った際はしっかりと文章を目で追って、鉛筆で線を引きながら読んだり、内容理解の問題も問題文を読んで答えたりする様子が見られた。

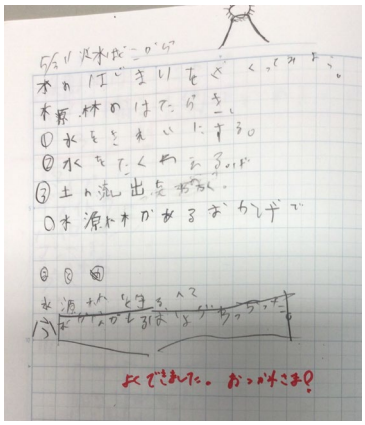
・音読に対しての抵抗感が軽減したのか、通級指導の中で「教科書の間違い探しをやりたい」「次は僕が読んで問題を出したい」など教科書を読むことを自分から希望する姿が見られるようになった。また、音読の声量も上がり、読み間違えてしまった時には「今のは間違いです」と素直に読み間違いを認められるようになった。

書きの実態

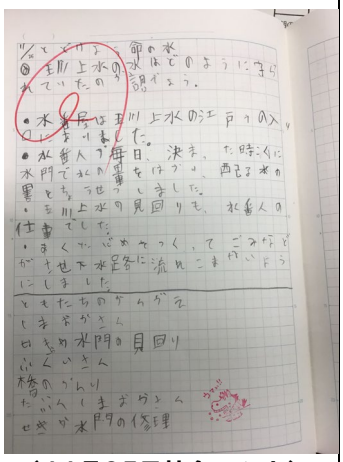
・URAWSS の書き課題では、以前は３分の課題を 30 秒区切りで休みながら行ったが、2 月に行った際には３分間続けて休みなしで集中して文字を書くことができた。

・通級指導では、タイピングで学習感想を書くことに慣れてきて、タイピングで書く作業は抵抗感なく取り組むことができるようになった。

・在籍学級でノートを書く量が以前よりも増えてきた。



（5月31日社会のノート）



（11月25日社会のノート）

計算の実態

・「九九表」「単位換算表」「電卓」などの支援道具を本児が自ら希望するようになった。支援道具を使うことで苦手な算数の学習にも前向きに取り組む様子が見られた。

・九九や繰り下がりなど四則計算の定着には課題があり学習が難しくなってきたが、授業中に分かることは発言して、計算を解こうと努力することができるようになった。

その他

・離席がなくなり、苦手でも投げ出さずに最後まで取り組むことができるようになった。

・社会や理科のテストで 100 点を取ったり、漢字の小テストで 70 点を取ったりすることがあった。

・理科の授業では、学習内容が分からない友達に対して学習内容を解説してあげる姿が見られた。

・通級指導では、以前は課題の合間に体を動かす時間や休憩時間を取ることが必要だったが、現在は 45 分間の授業で休憩時間を取らずに前向きに取り組むことができるようになってきた。

・通級指導で学習課題を自己選択させた際には、タブレットを使用した課題だけでなく、教科書を使った課題を自分から選択したり、「待ってる間にこっちの課題を先にやろう」「次は映像を見よう」など自分で学習計画を立てながら意欲的に学習を進める様子が見られた。

【報告者の気づきとエビデンス】

主観的気づき

実践当初は、読み支援、書き支援、計算支援、家庭学習支援の全てにフォーカスした支援を計画していたため、どれも中途半端になったり、本児の限界を超えてしまい夏休みには課題に取り組めないことがあった。その際に、魔法のプロジェクトの先生方から、本児が学びにアクセスする際に最も大きな壁となっている「読み」を中心に支援すること、本児の「やってみたい」「楽しい」という気持ちに寄り添って課題を選択させていくこと、とアドバイスを頂き 2 学期以降は「読み」の支援を中心として指導をしてきた。

年間の指導を通して、読みの流暢生や正確性の向上や語彙の増加が見られて、本児の読みの力が高まったように感じる。また、読みの力が高まったことで、書く時に正しい文字が想起しやすくなって書字の負担感が減ったり、学習内容へアクセスしやすくなったことにより学習への意欲が向上したり、各教科の学習内容を理解できることが増えてテストの点数が上がったり、と様々な部分でよい変化が見られた。

また、通級指導の中で感じた一番大きな変化は、読み書きの学習への取り組み方が前向きになったことである。「できない」「やりたくない」「疲れた」「休憩したい」と言うような言動が減って、「次は 6 年生に挑戦しよう」「次はこの課題をやろう」「目標は〇分にしよう」と前向きに挑戦しようとする姿が見られるようになり、本児の表情や言動からも自己肯定感の高まりを感じた。

また、実践当初は、タブレットやアプリを使った支援が中心であったが、本児の成長とともに教科書のルビ振りや九九表など ICT 機器を離れたアナログ支援を本児が希望することも増えていった。こちらが有効だと予想して用意したアプリでも、本児の必要感がなくなって使用頻度が下がっていったアプリもあった。このような本児の変化から、指導者は支援方法を一方的に提供するのではなく「本人が今、どんな支援を希望しているのか」「本人が試してみて、どう感じたのか」を重視して、本人と相談しながらデジタルとアナログの両面から本人に合った支援方法を一緒に模索していくことが大切だと改めて気付くことができた。

エビデンス（当初のねらいに関する具体的な数値の変容）

（1）読み書きの変容

表 1 の書き課題で 1 学期と 3 学期を比較して見ると、書き課題（有意味）の評価が B から A に向上しており、実際に書いた文字数も 43 字から 91 字に向上していた。取り組みの様子を比較しても、1 学期に比べて 3 学期は 3 分間連続で取り組むことができていることから、書字の速度が向上し、書字の負担感が軽減されてきたことが伺える。この書字の改善については、後述する読みの力が高まったことが大きな要因ではないかと考えている。

表 1 の読み課題では、3 学期で C 評価がついているが取り組みの様子を比較すると 1 学期は読み課題に正しく取り組むことができない状況だったが、3 学期は真剣に取り組むようになり、内容理解の問題では正答率も向上した。また、表 2.「特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン」の検査結果を見ると、単音連続読み検査の音読時間以外は全てで数値が向上している。数値が向上していない単音連続読み検査に関しても読み誤りは 6 個から 3 個に減少しているため、本児が間違えないように正しく読もうとした結果、音読時間が伸びてしまったのだと考えられる。これらの結果から今回の取り組みを通して、本児の読みの速度と正確性に向上が見られたことが伺える。

表 1. URAWSS の検査結果

	2022 年 4 月実施	2023 年 2 月実施
書き課題（有意味）	B（43 字）	A（91 字）
書き課題（無意味）	A	A
読み課題	評価不可	C
内容理解	2／6 正解	4／6
備考	・書き課題（有意味）は 1 分半で休憩を取った。書き課題（無意味）は 30 秒ごとに休憩を取った。 ・読み課題は、流し読みで本当に読めているのか不明のため評価できなかった。内容理解の課題も勘で回答していた。	・書き課題はどちらも 3 分間連続して取り組むことができた。 ・読み課題は自分で線を引きながら読む姿がみられた。内容理解の問題も丁寧に取り組んでいた。

表 2.「特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン」の検査結果

	2022 年 10 月実施	2023 年 2 月実施
単音連続読み検査【音読時間・読み誤り】	【36 秒・6 個】	【56 秒・3 個】
単語速読検査（有意味）【音読時間・読み誤り】	【1 分 18 秒・8 個】	【50 秒・2 個】
単語速読検査（無意味）【音読時間・読み誤り】	【1 分 23 秒・7 個】	【1 分 15 秒・3 個】
短文音読検査【総計時間・読み誤り】	【16、4 秒・2 個】	【13、4 秒・0 個】

(2) 自己肯定感の変容

表 3 の自尊感情測定尺度【東京都版】の結果を見ると、いずれの項目でも改善が見られた。特に A 自己評価・自己受容については大きく変化が見られていて、本児の自己肯定感が向上してきていることが伺える。校内の先生方の手厚いサポートで、自分に合った方法で苦手な教科学習に取り組むことができるようになったり、得意なことで周囲の人に認められたりする経験を通して、自分のことを肯定的に捉えられるようになってきたと考えられる。

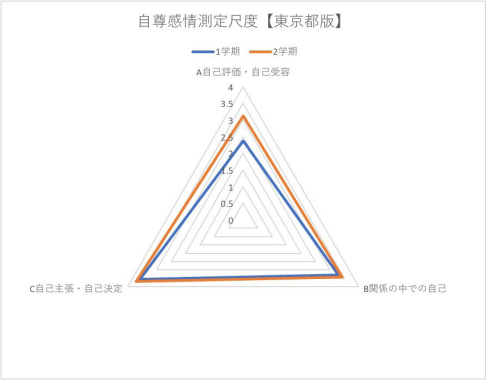


表 3. 自尊感情測定尺度【東京都版】の結果

学期	A 自己評価・自己受容	B 関係の中での自己	C 自己主張・自己決定
1 学期	2.38	3.29	3.57
2 学期	3.13	3.43	3.71

(3) 学校生活の変容

表 4 で昨年度と今年度の遅刻の回数を比較してみると、昨年度は年間を通して遅刻の回数が合計で 65 回あったが、今年度は 2 月 20 日時点で遅刻回数が合計で 2 回になっている。また、本児に関わる先生を対象にしたアンケートでも「遅刻が減った」「登校が早くなった」と回答した教員が 2 名いた。これらのことから、様々な先生方や保護者の支援により、本児が昨年度よりも学校に安心して前向きに登校していることが伺える。

表 4. 遅刻回数の推移

	R3 年度	R4 年度（2 月 20 日現在）
遅刻の回数	65 回	2 回

今後の見通し

来年度は 5 年生になり学習内容もさらに難しくなっていくため、今年度に有効であった読み・書きの学習支援は通級指導で今後も継続して行っていく必要がある。今後さらに読みの力を高めていくために読書習慣が確立できるように支援していきたい。また、在籍学級で使用している Chromebook を使った学習支援の方法も通級指導の中で練習していくことで、在籍学級での学習の困り感をさらに軽減していけるようにしていきたい。本児がさらに前向きに楽しく学校生活を送ることができるように今後も支援を続けていく。